
一本の木

一次関数

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一本の木

【Nコード】

N3209I

【作者名】

一次関数

【あらすじ】

人間に成りえない少年は、一本の木と対峙する。

(前書き)

去年は「列車は進む」という小説だったんですが、今年はこれを文
化祭で発表しようと思っています。

ですので、気になった点、良かったと思う点がありましたら、ぜひ
感想を頂きたいです。

一本の木がある。彼は家族だ。大地の奥深くに根を張り、力強くた
たずむその木。押しても動かず、声をかけても返つてくるのは葉の
間を駆け抜ける風の音だけ。何をしてくれるわけでもないし、僕も
その木に何をするわけでもない。何という木なのかも知らないし、
いつからそこにあるとも知らない。只、それだけが僕を唯一支えて
くれる家族なのだ。

僕のカゾクは虚構という言葉がよく似合う。親は昔から僕に道徳
という、大人が自分の人生観で得た我儘極まりない偏見を押し付け
てきた。僕がその道徳に納得がいかず、首を横に振ると「生意気だ」
と殴られる。

皆が正しいと思い込み生まれた偏見を否定すると、僕の存在が否
定されたのだ。僕の、いや人間の存在はそんな偏見に生かされてい
るのか。その偏見を受け入れて初めて人間と成りえるのか。

だとすれば僕は人間になることは出来ないのだろう。カゾクの言
う道徳を理解しえなかった僕は、人間になることを許されないのだ
ろう。

常識とは何だ。それが理解できない僕はカゾクから異端を見る眼
で見られ、異物として扱われる。人間に成りえない異物として。

僕は人間でなくなってしまうのだ。いや、もとより人間でなか
ったのだろう。この世界の全ての人間は、人間に成りえただけなの
だ。考えることができたから。理解することができたから。偏見を
受け入れることができたから。それが出来たから人間になれた。

そして、僕にはそれが出来なかった。僕は常識を理解できず、偏
見を受け入れられなかったから。

だから僕は人間になることを諦める。

カゾクと、家族になることを諦める。

どれだけ歩いたかは分からない。今自分がどんな姿をしているの

かも分からない。ただ目の前に一本の木があるここに、僕はいる。

目の前の彼は何も言ってはくれない。僕を認めることも、人間になることを諦める僕を諭すことも、何もしてはくれない。

でも、否定もしない。

僕は木になる。

人間には成りえなかった、だから僕は木になる。考えも理解も捨て、ただそこに力強くたたずむ。今の僕には精いっぱいすぎる生き方。

この木には悪いけれど、僕も彼になろう。

太い枝に縛り付けたロープの先を、首にまわす。

さよなら、人間。僕は木になる。

終幕。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3209i/>

一本の木

2010年12月10日07時13分発行